

會



報

1966年7月

253

日本山岳会

カラコラム・ヒンズークシ 学術探検隊公式報告書 の出版完成

今西錦司

一九五五年に行われた京都大学のカラコラム・ヒンズークシ学術探検隊については、その翌年に「砂漠と氷河の探検」(木原均編、朝日新聞社発行)と題する、一般向けの報告書が出版され、また「カラコラム」(今西錦司著、文芸春秋新社発行)や「モジュール探検記」(梅津忠夫著、岩波書店発行)などによって、その行動の詳細がある程度まで伝えられたけれども、学術探検隊としての公式報告ともいえるべき欧文の学術報告の方は、一九六〇年に至り、その第二巻が出版されたのをはじめてとして、その後、年を重ねること五年の間に、最初に計画された全七巻の刊行を完了した。しかし、その間になおもう一巻出さないうちは、報告の全部を盛りきれないことが明らかとなってきたので、第八巻を増補することにした。この分も今年六月に出版されるに至ったから、探検後一年にしていまや探検隊は課せられた仕事のすべてを終えた、ということができる。

公式報告書の名称は Results of the Kyoto University Scientific Expedition to the Karakoram and Hindukush, 1955 といひ、京都大学カラコラム・ヒンズークシ学術探検委員会による出版という形をとっている。体裁はさきに出たネパール報告全三巻のそれをそのまま踏襲している。つきに各巻の題名、編集者、頁数、発

行年代を紹介しておこう。

- Vol. I. Cultivated Plants and their Relatives, edited by K. Yamashita, 361 pp. 1965
- Vol. II. Flora of Afghanistan, edited by S. Kitamura, 486 pp. 1960
- Vol. III. Plants of West Pakistan and Afghanistan, edited by S. Kitamura, 283 pp. 1964
- Vol. IV. Insect Fauna of Afghanistan and Hindukush, edited by M. Ueno, 166 pp. 1963
- Vol. V. Personality and Health in Hunza Valley, edited by K. Imanishi, 299 pp. 1963
- Vol. VI. Zirni Manuscript, edited by S. Iwanura, 160 pp. 1961
- Vol. VII. Geology of the Karakoram and Hindukush, edited by S. Matsushita and K. Huzita, 151 pp. 1965
- Vol. VIII. Additional Report, edited by S. Kitamura and R. Yosii, 419 pp. 1966

いぶん大きいのではないか。これを京都大学内だけに限って考えても、それからのちの一〇年間に、水野清一によるイラン・アフガニスタン・パキスタンの考古学的調査を別として、なお六つの隊がこの方面に出かけている。すなわち、

- 一九五六、カラコラムとヒンズークシの接接地帯におけるパンジャブ大学の合同学術探検(日本側隊長藤田和夫)
- 一九五六、デマヘンド登頂をふくむイランの探検(隊長吉田光邦)
- 一九五七、スワト・ヒマラヤからヒンズークシにわたるパンジャブ大学との第二次合同学術探検(日本側隊長松下進)
- 一九五八、富士山岳会によるカラコラムのチムコリザ登山(隊長桑原武夫)
- 一九六〇、富士山岳会によるヒンズークシのノージック登山(隊長酒井弥二郎)
- 一九六二、富士山岳会によるカラコラムのサルトロカコリ登山(隊長四手井綱彦)

がこれである。

ここで注意すべきことは、これらの諸隊がもたらした資料のうち、学術的に報告の価値ありと認められたものは、すべてこの公式報告書の中に収録されたということである。とくに最初の一九五五年隊には、専門の動物学者が参加していなかったので、動物学的資料がいちじるしく貧弱であった。しかるに一九六〇年のノージック隊に、副隊長として動物学の吉井良三が参加したことにより、それが充実され、その報告が第八巻に収録された、というような次第で、そういう意味では、この公式報告書は、一九五五年隊の成果をどこまでも根幹としたいながら、内容的にはその後に出た諸隊の資料を吸収した、

カラコラム・ヒンズークシ研究の集大成であるといえる。

さきにした報告書は、学術探検委員会が出版したものだといつたが、委員会などというのは名目的なものであって、そもそもこの探検を企画し、実施し、ついで公式報告の編集から出版に至るまで、終始一貫してその影の力となったものは、F F の名で知られた京都大学内の任意団体、自然誌研究会(前会長並河功、現会長芦田謙治)であったことを、ここに銘記しておく必要がある。この八巻の報告書を前にするとき、ひとびとはマナスル計画以来つづいている F F の底しれぬスタミナに、驚嘆してもよいかもしれない。

この公式報告書は、純学術的なものであるから、一般登山家の直接の役にはたないであろうが、日本山岳会のライブラリーなどには、やはり欠かすことのできないものである。ただ、大学で文部省から金をもらってだすこの

目次

- Karakoram, Hindu Kush 報告
- 書の完成……………今西錦司……………一
- 深田久弥論(完)……………深沢忠孝……………二
- 拜啓・日本山岳会……………加納一郎……………二
- グルジア隊歓迎……………吉沢一郎……………四
- ソ連の7000 m峰(1)……………田村俊介……………五
- Z Goumha の標高……………望月達夫……………六
- 有志懇談会……………牧野 衛……………六
- 木暮理太郎翁碑前懇談会……………七
- 轡轡へ翔く……………片野次雄……………八
- SAC の記事……………八
- 図書紹介二……………山崎安治……………八
- 東海支部アソシエーション……………九
- 会務報告……………一〇
- 支部総会報告……………一一
- お願い・お知らせ……………一三
- 訃報・住所異動・除籍者……………一三
- 新入会員……………一五

種の出版物は、非売品となつてゐるため、自由に入手できないうらみがあ

(II) 二冊の本と 昭和十年

(深田久弥論ノートII) 深沢忠孝

▼その文体について 氏には五十冊近い単行本がある。当然読者も多いはずで、それらは全て文章を媒介として氏と対話する。氏の文章について言われていることも多いが俗な言い方をすれば全てベタ褒めである。

日本語の文章研究は本格的には昭和十年前後から始まるのだが、言語学的方法だけでなく心理学(主にゲシュタルト)的方法によって甚だ示唆に富み、基本的文献の一つに、波多野完治著「文章心理学」がある。今までに参照した本だが、今回その中核的論文「文章性格学」が実に深田氏の所説を基としてなされ、その学問的意味付であることに注目せねばならなかった。(同書 p.157~232 参照)

このことは日本文体論史上重要な意味をもつ。一研究者の発見や所論ではなく、五十冊も著作を公見にして来た人のそれが、文章心理学という新分野を開拓し、今では権威と目される人にヒントを与えただけでなく、学問的検証をさせるほどの発言をしたからである。要点を抜き書きしてみる。

「深田久弥氏は昭和七年十二月『芸春秋』誌上で谷崎潤一郎氏の文章を論じ、ひいて志賀直哉氏の文章に言及して居る。(中略)(谷崎の文章は)練達の文であり、天成の文章といひにくい。これに反して志賀氏の文章は、(中略)天成の感覚からあふれ出た真の名文である。」

私(波多野)はこの議論にひどく感心した一人である(略) いったい深田氏自身はどんな文章観をもっているのであらうか。「山の文章」の中ではある歌をひいて「こんな雄大なおおどかな調子の文が書けたらと嘆息した。どんな大きな活字で組んでも面恥しくないようなそんな文章が書けないものかしら」と言っている。又石川淳氏の文をほめた中で「軽快敏捷」とも言っている。波多野氏の所論の中には「文章」というものは、出来るだけ漠然と書くべきものだ。文章が漠然として居ると、それによって読者がいろいろの想像を呼びおこす余地がある。と言ったことがひかかれている。出典不詳)今これらによって氏の文章観を推察してもらう外はないが、唯氏の文章は視覚的であるだけは言っておきたい。(この点は波多野氏もふれている)

▼昭和十年 氏にとってこの年が画期的であるといふのはもう一つ、日本山岳会への入会である。その間の事情は調査不備で稿する段ではないが、これによって作家として、新進の山岳紀行家としての

登場、登山家としても別な意味での出発が準備されたことになる。略年譜としてそれまでを整理しておく。

- 昭和4、東大在学中「新思潮」第九次、第十次に参加[注2]
「文学」編集同人
ハオロッコの娘」文芸春秋 四月号
「新興芸術派俱樂部総会」参加[注3]。「若い作家の中でも深田久弥等の秀れた分子は『派』に属しているように見えて傾向はまるっきり異なっていた。(杉山平助) 文芸五十年)」

- 昭和6、2、金沢連隊に幹部候補生として入隊、年の暮除隊
昭和7、11、ハあすならう」改造十一月号
昭和8、8、ハ一昼夜」新潮六月号。
「文学界」創刊。
「青猪」改造六月号。
「ハわが山々」改造社
昭和9、12、ハわが山々」改造社
昭和10、6、日本山岳会入会。
「津軽の野つら」作品社。

【注】1、中島健蔵「現代作家論」 白井吉見 筑摩版現代文学全集 昭和と小説集」 解説(新潮文庫) 全書 昭和と小説集」 解説

2、3、したがって会報二四五号の拙文は誤り ※「深田久弥書誌・年譜」(東京山岳会)を参照したくと共に、氏についての資料その他御教示いただければ幸いです。(完)

以上で深田久弥論は完結しました。

★拜啓・日本山岳会様★……………加納一郎★

あきれる低調ぶり 日本山岳会の会報が二五〇号になったと会長さんは満悦のようであるが、その会報四月号が手もとに届いたのは六月も半ばを過ぎてからの北海道であった。いくら日本の果ての北海道であっても、これはあんまりひどい。片いなかであったも、東京から来いといわれれば、三時間後にはご対面のできるころである。人をバカにするにも程がある、腹が立ってこない。それま

今にはじまったことではない。これまでもずいぶん遠慮していたつもりであるが、この機会に一つとはいわず、二つも三つも苦言を呈して見ようと思う。 創刊のころは浦松さんの編集で、二色刷りの気さきいれたものであった。おたしも何度かご厄介にもなったことがある。山岳会誌でこれをまねるものもたくさんできたくらいである。時勢のうつりかわりで、浮き沈みのあったのはすべての会誌類の同様にたどった跡ではあるが、絶えるものはたえ、残るものは立派にたちなおっている。それにしても近ごろのこの会報の低調ぶりは、あきれられるほかない。

さめきつた味噌汁 いったいこの遅刊はどこから来ているのであるか。一般に雑誌のおくれている原稿がないか、編集意欲が欠けているのかのいずれかであるが、見たところ原稿不足のようでもないし、意欲がみとめられなくもない。では経理の不如意が原因か。であればページ数をへらすなり、会費のとりたてを厳格にするなり、やり方はいくらでもあるだろう。だいいち四月号が六月に届いてよいものなら、ことしの会費は、さらい年に出してもよいような気になる。そんな

な理屈はとらないにしても、要は定期刊行物にたいする考え方の甘さと、本業をもった人の片手間仕事であるという点に帰するであろう。ひきうけられ、おしつけられた担当者の苦心のほどは重々お察しする。さだめし本務の方をおしやってもこの仕事に多くの時間を投入されているのであろう。しかし無報酬だから、いかげんでよいというわけにはいかない。れっきとした日本的な組織の役員をひきうけただけ以上、タダであつてもトランプであつても、やることはやってもらいたい。うっかりひきうけたのは、こうした機関誌のタイミグについてのきびしい使命感に欠けるところがあるといわなければならない。創刊のころならともかく、出版活動の栄えする時点で、山岳会だけがのんびりしている理由はない。なに

も女や子供の雑誌のようなまねをする必要はないし、新聞紙や週刊紙のように、しぎを削ることもいらないとしても、何月号という以上は、その月に読者にわたることを目標として作られるべきものであり、それがせめてその月のカレンダーのかかっているうちに届くようにするのが当りまえのことではなからうか。さめきつた味噌汁ばかり提供されてきたのでは、いくら安宿でも上げ出したくなるのが人情である。会費をきちんと納めさせるまえに、まず会報をちゃんと出してもらいたい。

遅刊の真相はどこに 遅刊の真相は校了になってから納品までの日数が多すぎることだと推察する。この程度の印刷所でもって失礼だが、まずことしの印刷所でもって失礼はくれまい。もっとだいたいじな得意先

ものが優先されて、仕事のあいまいに機械にかけられるのが相場である。せつかく出来上がった組版が、何日もたなざらしをされているのは、編集者にはつらいことである。電話の二、三本は入れるのであるが、そんなことで用がたりのなら、世に苦勞というものはない。印刷所には印刷所の段とりがある。その段とりを早めるためには二〇ページにちぢめて、その費用を特急料金にするなり、会員の誰かの大口需要者の顔に便乗するなどの努力がのぞましいものである。この点まず考えて見てほしい。

それから納品から発送までに寝る日が何日あるかだ。納品などとお役所めいたことをせずに、印刷所から郵便局への道をとつたら、それだけ時間がはぶける。といつてもそれには人手が足りないといふところから、ここでも二ページ減にして、その金でアルバイトをたのむ。そして刷り上り即日発送ができる。問題は減ページまでして発行日を守らねばならぬかどうかにかへる。ここが定期刊行物にたいする認識のわかれるところであろう。

減ページをしる編集者の気がつかぬではないが、どうしても今月号でなければならぬ記事と、そうでない原稿とのけじめのつけ方、これの判断の鋭鈍である。なかにはもつと詳報してほしいものもあるが、なくもつて記事も見えない。内容の一つ一つについては触れないが、権威のある山岳会の機関誌であるからには、その中味は年季をいれた老功な登山者のリネックの中のごとくありたきものと注文したい。

校正はこうせい
さらに直言したいのは校正のお粗末なことである。校正とはただ章序の誤りをなくせばよいと考えている人もあろうが、そんなものではない。もちろ

ん印刷所には一応その担当者がいるはずだが、その人の役目は原稿どおりが精一ぱいである。ところが原稿そのものに誤字、誤用がおびただしい。昨今、編集者がよほどがんばってみても、これを退治するのは容易ではない。よってかならず毎号、専門の校正者の手をわずらわすことにはしてもらいたい。「山岳」の古いのには、校正者木暮理太郎などと明記されたものがあつた。校正ぐらゐ誰でもできると、うかつに考へては大まちがひである。だれでもパイオリンをもつて音を出すことはできようが、巧拙はさておき、人の聞くに耐える演奏をするには特別の修練があるのと同様に、校正にもその道がある。ただ魯魚の別を見わけただけが能ではない。右と左とちがっていたために、道をまちがえて死に至る場合もありうる。芥川のこととあり、まことに「校正おそれるべし」とある。

会のお人が背なかに糸くずをつけて多勢の席に出られたらどうであろう。それも毎度のこととなれば、はずかしい限りである。校正の下手きば、これと同じ。カラは白くとも、背中やスソに赤い糸くずがついていたのでは、これが日本山岳会の会報とあつては、あまりに情けない。
専門の校正者をたのむほどの人件費はありませんとおぼえる。そこでもう二ページなり四ページなり減ページをする。二〇ページが二一ページになつてもよろしい。だぶだぶの服に糸くずいっぱいつけたのが現われるよりも、ひきしまった編集と、すつきりとした装いをくらぶべきである。きよいイワシをえらぶべきである。

これら是非、専門家の手をへるようにしてほしい。望月さんの熱意と努力には敬意をおしまないが、どうか卑見に耳をかたむけてもらいたい。もう一つすこし前のことであつたが「山岳」の巻頭にでた会長の寄稿、まことに卓見で万福の同感をもつて読んだが、これはまへに岩波の「図書」で見たものも読ませ、後世に残るようにならしたいと心持であるが既載の雑誌が「山岳」よりははずつとサーキョレーションの多い、著名なものであるだけに、筆者、編集者の識見を疑いたくなる。会長だからというわけではなかつたらうとは信ずるが、やはり「山岳」は「山岳」なりにファーストハンドの記事を本記としてほしい。スクラップのつもりならば巻末の小字欄でよい。このようなあやまちをくりかえしてほしくない。当時、痛感したことをかきそえる。

要するに
「山岳」や会報の編集を担当の方々はみな岳識と経験のゆたかな立派な人材であり、お世話になり、永年の交誼をうけて心から尊敬している人がおおいのであるが、あえてこれだけの非礼の発言をしたのは、日本山岳会がわたくしにとっては一番にすきな、永年の所属団体であるからだ。地方にいる会員にとつては、こうした印刷物によつてのみ、仲間のよろこびをうけとることが出来るのであり、在京の会員にしても会合に出席の人数は五〇名高々一〇〇名くらいのものであるらしい。さすれば会員の九割以上は、会から届けられる印刷物によつて会員たることを意識するのである。会の仕事として出版物の大切さをもつと評価しなければならぬ。

日本山岳会会長も副会長も、日本のジャーナリズムの頂上を走るいてきた人である。その他の役員がたも皆々

ここでわたしがいつた程度のことなど千やお付きのはずであり、会議でもくりかえして話題になつたことだらう。あるいはもつと高い構想をおもちかも知れぬ。ただ、わかつているが実現できないというのが実情であらう。そこでわたしのよう、ツンボサジキで、キセルをくわえている気象者のかけ声が必要なのではあるまいか、と得手勝手なかんがえからの一筆かくのごとし。非礼万謝。(六月二十五日)
(中見出しは編者挿入)

山岳61年の内容は去る七月定例理事評議員会で左記の通り決定しました。但し未着の原稿が二三ありますので、極く僅かな変更のあり得ることを御了承下さい。
ゴジュンバ・カン登頂 高橋 進
ローツェ・シャルル一九六五年 吉川尚郎
キンヤン・キッシュニ一九六五年 鹿野勝彦
ペルー・アンデス一九六五年 井田英彦
困那山の話 藤島敏男
ダウラギリII峰一九六五年 杉田 博
西部カラコルム・ディラン峰 塚本珪一
コー・イ・モンデイ一九六五年 矢野 真
ミール・サミール紀行 佐藤之敏
グリーンランド・スイスの踏査と フォーレル峰の試登 宮原 巍
コルディエラ・ノルテ一九六五年 細野淳美
ローガン峰一九六五年 川上 隆
マッキンレー南壁東稜 塚崎義人
アイガー北壁 高田光政
マッターホルン北壁 芳野満彦
ドリユ西壁、北壁 吉川政弘

ソ連の4つの7000 M 峯 (1)

—その登攀クロニクル—

A.I. Polyakov 著
田村俊介 訳

ソ連のアルピニスト達は、ここ数年来、著しい成功をおさめてきた。1959年だけでも、過去26年間(1933年~1958年)とほぼ同数の29人の登攀者がPIK KOMMUNISMAに登頂した。1960年の夏には、LENIN生誕90周年に関連し、LENIN峯に116人のソヴェトのスポーツマンが登った。次にソヴェトの7000 M 峯の登攀クロニクルを記す。

PIK KOMMUNISMA (COMMUNISM 峯)—7498 m—
PAMIR, 科学 ACADEMY 山脈と DETERI 山脈の接合点

No.	登年	攀代	登頂者数	未登頂者数	Route および登攀隊長、登頂者
1	1933		1	2	Bivouchnii 氷河を経て東稜より。隊長 N. Garbunov, 登頂者 E. Abalakov
2	1937		5	3	同上 Route より、隊長 O. Aristov
3	1955		4	1	Belyaev 氷河から南東稜を経て、隊長 N. Kakhiani
※4	1957		10	1	Garmo 氷河より、Kuibishev と Pamirskoe-Plateau を経て、隊長 K. Kuzmin
※5	1958		9	0	Bivouchnii 氷河から東稜を経て、隊長 E. Nagel
6	1958		0	7	Garmo 氷河を経て、隊長 N. Belavin
7	1959		5	0	Garmo および Belyaev 氷河を経て南壁の Buttress より、隊長 K. Kuzmin
8	"		10	3	Bivouchnii 氷河から東稜を経て、隊長 V. Elichibekov
9	"		14	0	Belyaev 氷河から南東稜を経て、隊長 E. Ivanov
10	"		1	0	Belyaev 氷河から南東稜を経て、単独 Yu. Kassin 下降中に死亡
※11	1961		14	0	Bivouchnii 氷河から 6853 M 峯の頂上の稜線および Pamirskoe-Plateau, Georgia Alpinist Route (1955年) を経て、隊長 E. Tamm
12	1962		5	3	Belyaev 氷河から南東稜を経て、隊長 K. Kletsko と M. Khergiani
13	"		8	0	同上 Route より Soviet-Britain 合同隊、隊長 A. Ovchinnikov と M. Slessor.
Total	86		19		

PIK POBEDA (POBEDA 峯)—7439 m—

天山、東 Kokshaal-tau 山脈

No.	登年	攀代	登頂者数	未登頂者数	Route および登攀隊長、登頂者
1	1938		3	7	Zbezdochika 氷河から北斜面 (A. Letaveta 学術探検隊) Commsomol 20年記念峯 (6930 m, 独立峯でなく (Pik-Pobeda の一突起) を経て、隊長 L. Gutman

2	1949	0	8	Zbezdochika 氷河から北斜面を経て隊長 A. Alekssev
3	1955	0	16	Chon-Teren 峠から東稜を経て、隊長 V. Shepilov
4	"	0	12	Zbezdochika 氷河から北斜面を経て、隊長 E. Negel
※5	1956	11	0	同上 Route より、隊長 V. Abalakov
6	1958	7	6	Chon-Teren 峠から東稜を経て、隊長 I. Erokhin
7	1959	0	10	Zbezdochika 氷河から北斜面を経て、高度 7000 m に達す、隊長 P. Karpov
8	1961	4	2	Dikii 氷河から 6918 M 峯を経て、隊長 D. Medzmari, A. Shvili 隊員 I-Gablani T-Kukhianidze 三名は遭難 K. Kuzmin
Total			25	61

PIK LENINA (LENIN 峯)—7134 M—

PAMIR, ZAALAIKII 山脈

No.	登年	攀代	登頂者数	未登頂者数	Route および登攀隊長、登頂者
1	1928		3	0	南面から Sauk-Dara 氷河を経て、ドイツの Alpinist, E-Alwein, E-Schneider, K-Wien, 隊長 R.R.
2	1929		0	5	同上 Route より 5850 m まで達し続いて 6850 m まで達する。隊長 K. Krilenko
3	1934		0	21	Lenin 氷河から北斜面を経て 6950 m まで達する、隊長 K. Krilenko
4	"		3	3	同上 Route より、隊長 N. Chernukha と V. Abalakov
5	1936		0	70	同上 Route より 6950 m まで、軍人 Alpinist 隊、隊長 Baibalinov と L. Barkhash
6	1937		8	2	Lenin 氷河から北斜面を経て、隊長 L. Barkhash
7	1950		12	2	同上 Route より、隊長 V. Patsek
8	1952		0	10	Lenin 氷河から Pik Razdelnii を経て 6900 m まで、隊長 V. Abalakov
9	1954		7	0	同上 Route より、隊長 V. Kovalev
10	1955		7	0	Oktyabrskii 氷河を経て、南面から縦走 Pik Oktyabrskii と Pik Lenina, 隊長 K. Kuzmin
11	1956		16	0	Lenin 氷河から Pik Razdelnii を経て縦走、隊長 A. Korolev
12	1957		8	8	同上 Route より、隊長 V. Elichibekov

注: No. 1 の隊長は Willy R. Rickmers (次号に続く)



ゴジュンバ・カンの標高のことなど

望月 達夫

去る六月のJAC創立六十周年記念展に際して作成されたパンフレットは、表紙にエベレストのカラー写真を載せ、本文中にも大正八年七月剣岳頂上における近藤茂吉氏の珍らしい写真等をおさめた、体裁内容共に上出来の作で、山崎安治はじめ編集担当各位の労を多とするものだが、二、三の誤りを見出し得るのは遺憾である。

その誤りのなかでも、山の標高などになるべく、JACの刊行物ということ、頭から信用され、訂正されぬまま流布されてゆくから困るのである。ゴジュンバ・カンの写真に添えられた七八九mという標高も、正にそれに該当すると思う。

実は先に高橋進氏から「山岳」61年の原稿として私に送られたものにも、この数字が採用されていた。私は多年「山岳」の編集にたずさわった経験から、「山岳」の原稿として送られてきたものの中に、原稿、人名、標高、過去の登攀年月等に誤りの少なくないことを知っている、この標高数字七八九mの正否にも、いささかの疑念を抱き、早速手許の資料で検してみたところ、次のような結果を得た。

・七八八九mと記載してあるのは山日記29輯唯一つ。
・七八三九m 山日記30・31。王立地

学協会エベレスト周辺図(十万分の1)

・七八四二m 山日記14・23・24・25
・メイソンのヒマラヤ。

以上によって判ることは、積々古いものは七八四二m(二五七三〇呎)で、比較的新しいものは七八三九m(二五七二〇呎)ということである。即ち呎でいうと一〇呎の相違である。かつ七八九mを採用している山日記29で呎が併記されているのだから、これは明らかに製作者吉沢一郎氏が七八三九の3と8とを誤記されたものではなからうかと推測し、その点を同氏にただしたところ、七八八九mの出典は調べても遂に判らなかつたし、多分自分の誤記だろうということであった。また同氏の調べではデイレンプルトが七八四〇mを使っている由である。と同時に明大の大塚博美氏にも、この数字の何によったかを質問したが、結局確たることは不明であった。

明大隊は計画の当初から、山日記に唯一度誤記された七八九mという数字を使用し続けた。一つの山に二、三の異なった標高がある場合、少しでも高い方を採用するのは誰しもやることが多いから、これは責められる要はないが、少し前の山日記と呎の数字まで注意したら疑問が生じた筈と思う。

その結果、昨年の計画発表以来登頂に至るまで、各新聞紙上に発表された標高はすべて七八八九mであり、これが誤りを拡散する結果となっている。然しながら、前述の説明でも明らかのように、従来ゴジュンバ・カンと認められたピークの標高は、七八三九mが正しいと言わねばならない。

ところが、明大隊が登頂したピーク即ち前記のパンフレットに写真が掲載されたピークは、従来ゴジュンバ・カンと考えられてきた七八三九mの

ピークとは明らかに違うようである。このピークは王立地学協会の前記の地図で見ても明白のように、チョー・オユウのすぐ東隣りのピークで、明大隊が登頂したピークは、そのもうひとつ東隣りのピークである。この点は、計画発表当時新聞に掲載された写真(七八三九m峰)と実際登頂されたピークの写真とを比べてみれば、一目瞭然である。しかも、登頂者の観察によると七八三九m峰より幾分低いと報告されている点を参酌すると、約七八〇〇mというのが、ほぼ妥当な標高であると思う。

ここで一応結論に達したと思つたところ、最近ドイツの Research Scheme Nepal Himalaya によつて編纂された KHUMBU HIMAL (1:50,000) という地図(一九六五年刊)のことを知り、その部分図のリコピーを松田雄一氏から寄贈された。それを見すると、チョー・オユウとギヤチェン・カンの間には三つのピークが示され(山名は記されていない)、西から東へ七八〇六m、七六四六m、七六一〇mの標高が夫々附されている。また近着の「マウンテン・ワールド一九六四一六五年」のA・ポリンダーによるリストには(同書一九七頁)、前記の三ピークに夫々ゴジュンバ・カンI II IIIの名称が与えられている。従つて万一従来の七八三九m峰が、この新地図の七八〇六峰(即ちゴジュンバ・カンI峰)に該当するとするなら、明大隊の登頂したのとは、そのII峰、即ち七六四六m峰に相当することになる。因みに新地図は、山岳地図製作では既に定評のあるE・シュナイダーの手が加わつたものだから、信頼度の高いものと思つ

たところ、縮尺も五万分の一という、地学協会図の十万分の一に比して、更に一段と精細をきわめたものである。私は目下のところ、明大隊の登頂したピーク

は、七六四六m、即ちゴジュンバ・カンII峰とするのが、一番正しいと考えられているが、その点当の明大隊関係者はどう御考へか、その御意見をうかがいたいと思うのである。

言うまでもなく、私は他人の間違ひをほじり出して悦にしているような魂胆から、こういうことを書いたのではさらさらしない。JACの刊行物は、山岳にしろ会報にしろまた山日記に、誤りがあつてはならないし、若し誤りがあつたら出来るだけ正しておかねばならないと思うからである。「山岳」の編集にあつたのは、この点に最も力を尽してきたつもりだが遺憾ながらなかなか完璧を期し得ない。しかし、印刷に先だつて数多くの誤りを、訂正してきたことは事実である。

だが、誤りのない原稿、誤りの少ない原稿にしくはないのだから今後執筆される方々にたいし、上記のような事項に望しては更に一段の慎重な調査を強く要望してやまないものである。

(追記) 草し終つたあと、こころみに深田久弥氏の『ヒマラヤの高峰』第一巻所収の高峰表を見るとゴジュンバ・カンの標高は七八八九mが採用されている。この表の作成に馬場勝嘉氏も協力し、かつ山日記を参考にしたとも書いてある。偶々本書が刊行された一九六四年の山日記が、前記の29輯にあつたので、私の想像では、この数字もおそらく山日記がもとではなからうかと思う。尚『ヒマラヤの高峰』別巻の写真集でも、同様に七八八九mが使用されている。深田氏にはまだたずねてみる機会がない。(一九六六・七二)

「有志閑談会」
本年の有志閑談会は六月十八日六義園心洗亭で催した。幸い会員の集る頃から晴れあがり園内の緑も一段と冴え清々しいなか心洗亭をバックに記念撮影し、島山大先輩の音頭で乾杯の後、歓談にうつる。
まず加藤、松田両氏より会の情勢と現状報告、つづいて最近シルクロードの探検から帰られた、深田氏の興味深い見聞話および六十周年記念に会の基金募集についての提案、藤島先輩は各山自歴の記録を作り保持するよう提唱、島田氏は会報の合本に高値がついた話から立派なライブラリーを要望、紅一点の今井さんは山岳会というところはお話、日高、神谷両名譽会員は各国の山岳人に對し肩身のせまい今のルーマを何とかして、エベレスト登山をめざす国際的一流のJ.A.C.に相応しいルーマにとの強い要望、つづいて渡辺副会長から六十周年記念展に御來場の皇太子、常陸宮兩御夫妻の御様子について報告があり、望月氏は最近海外で名声の高い「山岳」の内容を一層充実させたいと、最後に足立画伯からルーマの絵画、書籍の保管は手落ちなきようにと、そのために立派なルーマが欲しいと、日高、神谷両氏の発言に重ねて希望され、今回は、ルーマ問題で大勢より、交通至便の場所に立派



はくさんさうろ (吉沢)



木暮理太郎翁
碑前懇親会報告

山梨支部

快晴の五月十四日、増富温泉奥の金山平において、第四回、木暮理太郎翁碑前懇親会を開いた。木暮翁逝いてはや二十二年、東京からのお客様を迎えて十五名。望月支部委員長の司会により、神谷恭名餐会員が「記念碑の台座の石の色もうれしくて大変うれしい。去年植えた白樺もよく根を張って来た。」

そこで今度は、生前先生がお好きであった花の咲く木を植えたいと思う。私の山の父であり、兄である翁を、年を経るにしがたつていよいよ敬慕の念一しおである。来年は二十三回忌を迎えるので本部からも大勢来てもらって盛大な懇親会をしたい。私も歩けなくなるまで来たいと思っている。」

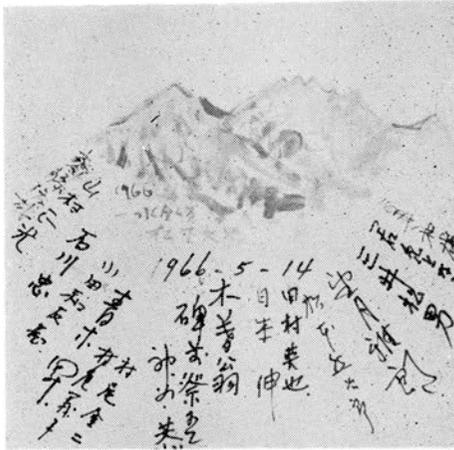
また青木昇氏は、「私が独身の末期、会の委員を仰せつかり、そのときから大変かわいがっていただいたが、山行を御一諸していただく機会もなくなくなられてしまった。今先生の碑前に立つと感無量である。秩父の山谷について沢山の教えをいただいた。今から三十五年、川端下から雪の国師岳金峯山をこえて、ここ金山に来たことがあるが、先生から細かい注意を受けて来たのである。五月はみどりの美しい時であり、山の幸も多いため、今後機会をみてまた訪ねてみたい。」

最後は三井支部長が、「今日は昨年モンブランエギニ近くでなくなった君島久登君の母堂がみえておる。あの節は本部の方々に大変お世話になり、永遠の記憶として先生のおそばに記念

植樹をしたいと申出ている。また地元支部として生命あるかぎり、山の友情としてこの碑を守って行きたい。」

記念撮影、植樹のあと、有井館で恒例となった支部員手づくりによる山菜料理に舌つみをつらうった。特に今回の圧巻は、斎藤俊哉会員手配による、イノシシの肉のサシミであった。始めはこわおと手を出していたが、そのくせのない、舌の上でとろけるような味に魅せられて、たちまち二キログラムを平げてしまった。ちなみに当日の献立は、サンシヨ、タラノメ、クワ、ワラビ、ビーマンのでんぶら、ゴゴミ、ミネバ、ワラビのおひたし、ヤマウドのゴマ和え、キウリ、タマネギのドレッシング、レバーのチャシニであった。仏法僧の声をききながら夜おそくまでランプの下で酔談し、明けて十五日

天気は芳ばしくなかったが有志十二名が日本伸、小田和友蔵両氏のリーダーの下に木賊峠をこえて黒平を経て金桜神社まで、ゴゴミ、タラノメ、ヤマウドをとりながら記念山行を行った。林道が木賊峠のはるか南、茅ヶ岳の



近くまでのびていて一同驚きの眼をみはった。

来年の懇親会には是非とも多く会員の参加を心から望んでいる。「神谷さんがヨッパラって紙色からすこしはみだしていただきますがよろしく。」

(山村正光記)

フリップ・ローゼン
タール氏夫妻と
富士山へ

宮下秀樹

世界各地に四百ヶ処の展示場を有する西独逸の陶磁器メーカー、ローゼンタール社の社長夫妻が東洋初のスタジアム開設とあって来日した。アコンカグアポボカテトル(メキシコ)、キリマンジャロ、カラコルムのゲント(七三〇〇米余未登)等を登った無類の山好き、ドイツ山岳会の外国担当理事をしており、是非この機会に富士山へ登りたいと登山装備一式を持参したとの事。

加藤喜一郎先輩の独特な鼻にかゝつた声に呼出され、支部の須田紀子さんに御行願って、梅雨のはしりの六月五日富士吉田に出掛けた。

六日早朝五時に宿を出て佐藤小舎まで車で快適に飛ばし、直ぐ登り始めたが生憎の天気で殆んど視界が利かず、時折り小雨九合附近より雪も吹きつける位

オックスフォードでポートの選手をしており、大戦中はフランスで抗ナチ・レチスタンスに加わりつかまつて二度も脱走して最後は外人部隊にまで入って戦った、フアイトマンの四十九才のフリップ氏とアイルランドで結婚し、三人も子供さんの

いる奥様とも非常な健脚でこちらがシゴカれる始末。
二回休んだだけで十二時着。濃いガスと強風の頂上は残念だったが日本の最高峰に登った満足感をワインとともに味わった。
観測所は割愛させて貰って帰途は、克蘭ボン、ロープを付け吉田大沢を通って下山。夫妻ともまだ歩き足りない顔をしているのに改めて感心させられた。

ウエイジャー教授逝く

Lawrence Rickard Wager

Feb. 5, 1904 ~ Nov. 30, 1965
ウエイジャーといえは、一九三三年にエベレスト遠征隊に参加し、W・ハリスと共に第一次攻撃隊に選ばれ、八三五〇mのC6から酸素なしで八五八〇mまで達した登山家として、われわれには覚えがある。
E・シンプンがG.J. March, 1966の追憶記で述べているところによると、エベレスト周辺の地形学上で大きな功績を残している彼も、本命は東グリーランドにあったらしい。その証拠には Gino Watkins 隊の加えて四回(30~1, 32, 35~36, 53)もそこへ行っている。

幼年時代を西インド諸島で過ごしたが、後劍橋大学で地質学(特に石油関係)を専攻し、ダラム大学(44~50)、牛津大学(50~)でその部門の教授。戦争中はRAFに属して中東およびロシアで活動した。
RGの会員に選ばれ(52)、そこで評議員を三回つとめ、RSの一員になったのが一九四六年、彼の科学上での貢献がこれでおか。劍橋大学山岳会長、そしてエベレスト基金審査委員(Screening Committee)としては、死の一ヶ月前まで積極的に活躍していたという。(吉沢一郎)

★日本山岳会、SAC会員歓迎★

スイス山岳会の機関誌「Die Alpen」七月号に「SAC als Gast beim JAC (Japanischer Alpenklub) in Tokyo」という記事が写真(会費二五五号掲載と同じもの)入りで出ていた。筆者はZollikon(Uto支部)の Werner Lettsch氏。その記事を要約すると次のようになる。

この春、アーノルト・グプラー博士夫妻を含めて六名のSAC会員(他に非会員二名)が極東旅行を行なった。博士は一九三三二年の二〇年間、北海道大学でドイツ語を教えたことがあり、その間、主としてスキー・ツアーでJACの会員と懇意になり交友を深めていた。こんなことで、旧知の人に引率された一行が、東京に着いた時から大歓迎をうけたことは理解出来る。

四月四日の夜、北京マンションに招待された。日本の登山家は一六人出席。会長松方三郎(サボロー)氏はニューモラスな調子で彼らを紹介していた。アイガーのミッテルレギー稜登攀者、同名小屋の寄付者、マナスル登山隊でわがSACの長老でもある植有恒氏がいたことはいうまでもない。

われわれスイス人は大きな山岳会から来たのだが、スイスの大登山家達(D. Z. C.)の中に聞かれては、いささか小さくならざるを得なかった。だがわれわれは幸福であった。この友情は、松方会長も述べたように、両国の古い深い結び付き(Verbandtheit)から生じているものと思う。われわれも又、この夜と同じように、日本のお客様をスイスに迎えたいものである。国内旅程の説明略す、牛の鈴のことも書いてある。帰国に際しては、植氏その他多数会員の温かい見送りをうけた。

鞆帽へ翔く

故「大島亮吉」の夢

安川茂雄氏の山と生活

片野次雄

作家であり登山家である本会会員(会員番号二四一八番 安川茂雄氏の活躍ぶりには、眼を腫るものがある。会報二四六号から二五〇号にわたって連載された「日本のアルピニズム」で明らかにされたように安川氏の「大島亮吉」への傾倒ぶりは、まこと悲壯なものがある。其の悲壯感がまた「大島亮吉」を研究せしめる要因であり、好むところであることに間違いないのだが、研究内容を含めて現在この仕事が出来ない人は他に見当るまい。すでに自費出版のかたちで陽の目を見た「登山者」「漂泊者」の巻末に収録される大島亮吉年譜と解題ノットに眼を通せば安川氏の意図するところが判かる。

本文は大島亮吉の未発表のものも含めて、紀行、随想、山行などに古典的な要素を盛り込みながら分類され、しかも読み易く編纂されている。造本にももし仮りにこれを「大島亮吉全集」と名付けても、もっとも恥しくないほど心が配られていて好ましい。だが山岳図書の金字塔に打ちたてていくにふさわしい記念すべき事業を、たつたやむらなければならぬところにも問題がある。ともあれ目下「登山史上の人々」と題する決定稿に朱筆を加えていると聞く。かつて鞆帽に夢をさせた大島亮吉にかわって、鞆帽に夢を持つ者が其の夢を果すべき翔くことになった。安川氏の今後の活躍に期待したい。

(一九六六・六・二八)



アンデスから

ヒマラヤへ

浜野吉生著

身内の書いた本

本がたくさん売れて、著者の飲みものがあせげ、さらに余った次の遠征の資金のたしにでもなれば、こんなうまいことはないと思つて筆を止めた。副題にもある通り、早大山岳部による一九六五年のネパール・アンデスと一九六五年のネパール・ヒマラヤのロイツェ・シャル遠征に参加した著者はアルパマヨの第二登、ネパド・チュルップ・ネパド・ウアマンリバの初登頂を行ない、ロイツェ・シャルでは千五百メートルまで達し、登頂の可能性を確認して戻つてきた。

近藤先生を通じて白水社からこの本の出版の話がまとまったと聞いてそれは結構だと思つていた。三月のある日浜野君が小生の会社を訪ずれ、原稿はまとまるといわれ、どうしたものだろうかと、どざりと部厚い原稿のたばをさし出しいささかとまどい顔をしている。ばらばらとみたところで、急にどうともいえない。二日ばかりあずかつて急いで眼を通してみた。字は御本人の四角ばつたものではない。どうやら奥さんが清書したらしい(彼女も早大山岳部OGである)。それはともかくとして、文中やたらにどうでもよいようなことや、あけすけな馬鹿話やが延々と述べられても、小生が編集者でもこのつははどうも考えた。白水社の担当者が顔をたてにぶらなかつたのも無理はない。

そこでマジックインキでそういつた

箇所を全部消してこれならよからうといつて原稿を返した。御本人にとつてはかなりユモラスなつもりでイキがって書いたらしたので不服顔だったが、それで白水社の方もOKになったようだ。

どうも脱線してしまつたが、身びいきなしにいつて大変うまく書けている。たんたんと述べられているが、とくに八千メートル峰の巨峰の登山となると、どんなきつものか、それが十二分に文中ににじみ出ている。最近のヒマラヤ関係の本では一本筋の通つたものだけに色々のものといえる。またこの種の本でかく無視されやすいスケッチや、行動日誌が付されているものも行きどいており、装幀もスマートでよろしい。また蛇足だが、この本の出版記念の六月十日の夜は西武のJAC六十周年展の飾りつけで夜中まで手が離せずいつに欠席しまつたに残念だ。いずれゆくりお祝いかたが大いにお酒をくみかわしたい。

昭和四十二年五月二十日、白水社発行、写真二十六枚、二百七十四ページ、定価九百円。(山崎安治)

日本における地図測量の発達に関する研究

高木菊三郎著

日本の地図測量の変遷とそのいきさつを研究したもので、創始編「我が国における地図測量の発達に関する研究」近代地図編「日本が行なつた国外測量の研究」の二部に大別されている。第一部は著者が畢生の事業として六十年余りにわたつて集めた資料にもとづいて得た研究で、昭和三十七年東北大学理学部に提出した学位請求論文である。第二部は著者が明治三十九年参謀本部陸地測量部に勤務以来五十余年一貫して関係してきた日清、日露の戦

役を通じ日本の中国における測量地図の実態を記したもので、日本の地図測量史上見逃せないものといわれる。著者はすでに昭和六年日本地図測量小史という好著を出版されているが、今回の新著は豊富な資料を縦横に駆使し、日本における地図測量の過程を専門的に解明し、学術的に大きな価値あるものと思う。

巻頭の写真は、北野神社・日本北辺地図大鏡・松浦武四郎奉納、加藤清正奉納と伝えられる神鏡面裏の日本図、北野神社・日本西辺地図大鏡、検地要具之図など貴重なもの二二点がおさめられている。鍬形惠齋江戸鳥瞰図なども鮮明に複写されており、はるか品川湾の向うに目黒不動、白金、泉岳寺、東禅寺、御殿山、東海寺、増上寺などはつきり読みとれる。七十七歳の著者は元氣に会の会合にもよく顔を出されるが、数年前の六月、六義園の有志閑談会で「日本地図測量小史」に筆者の求めに応じ次のような句を志しためられた。

巻末に参考文献、著者著述目録がおさめられている。昭和四十一年一月十五日風間書房発行、一七五ページ、定価三千八百円(山崎安治)



東海支部 アンデス学術遠征隊 帰国報告会



▽日時 七月二日午後六時
▽場所 中日ビル四階大会議室
▽主催 名古屋大学高所医学研究会
日本山岳会東海支部
中日新聞社

▽報告内容

- ① 後援会長あいさつ……徳川義親
- ② 隊長あいさつ経過報告……高木健太郎
- ③ スライドによる報告
- (イ) アコンカグア北面の学術調査
- (ロ) アコンカグア南壁登攀
- (ハ) パタゴニア地方踏査
- ④ 映画
- ⑤ 討論

報告

司会……原 武氏

昨年、十月十一日に横浜を航し、南米アンデス山系の最高峰アコンカグア(六、九六〇メートル)の北面において高所医学の研究と隊員の高所順化を行ない、ついで本年二月、世界において最も困難であるという三〇〇〇メートルの南壁からの登頂に成功しました。更に岩と氷のバタゴニア地方も踏査して、本年一月末から五月下旬にかけて全員帰国し、本日ここに報告会を開催することができました。これは、ひとえに関係者諸賢の公私、物心、両面にわたる多大の御支援の賜物でありまして、隊員一同を代表して衷心より深く感謝するものであります。

出発に際しては、期日の切迫と膨大な輸送の準備に追われて失礼をいたし留守中は何かと御厄介や御心配をかけた、帰国後は記録および荷物の整理が未完了のため、各方面の方々に対して御迷惑をかけた、不届きの点が多いと存じます。深く御詫び申し上げます。海外におきましては駐外大使館、各国政府ならびに在留邦人の方々の心のもつた御援助や御接待を受け、お蔭様にて隊員や裝備の輸送、食糧の購入、宿舎の確保など遠征に伴う煩わしい諸事が円滑に進びました。ここに厚く御礼を申し上げます。

この遠征の直接の学術研究の結果、およびこれに先き立って行なわれた低圧実験による成績・登山の詳細については記録や写真などの整理、荷物の到着を待って、全員協力の上、何れ遠征記録として正式に公表する予定であり、今回はその中間報告としてこれをお届けいたします。

- 学術研究としては、
- 一、高度変化に伴う生体二十四時間リズムの変動
- 二、高所における呼吸、循環機能の順化
- 三、高所における主観的、客観的症狀
- 四、無線テレメータリングによる登山中の心電図の研究

の四つに概括できます。その成果は国際生物学事業計画(I.B.P.)の一翼を荷うわが国の研究に寄与すると共に、メキシコにおける次期オリンピック競技への強化対策としても貢献し得るものと信じます。先般すでにオリンピック強化対策委員会において私見を述べておきました。成績の二部はNagoya Journal of Medical Scienceに掲載される予定であります。学術研究の測定機器については、文部省および日本学術会議の絶大な御援助を受けました。ここに深謝の意を表します。

強烈な日照・寒冷と強風・極度に乾燥した薄薄な空気が、峻険な岩壁、これらの困難を克服し、ただでさえ苦しい登攀の間隙を縫って、医学実験の被験者となり、また検者となって、一連の研究を推進した隊員の努力は賞讃に値するものと信じます。多くの物質と金と時間を費したことは、この学術的成果、南壁登頂の成功、および隊員各自の貴重な自己体験によって充分に償われ、輝かしが一頁を日本登山史に加えることができるでしょう。

二十世紀末には、世界の人口は、現在の二倍の七十億に達し、人類の将来の幸福のために、この遠征が有意義であったことを信じて疑いません。皆様、本当に有難うございました。

アンデス学術遠征隊 隊長 高木健太郎
一九六六年七月二日

行動日誌

- 1965年1月19日 第一回低圧実験(名古屋大学医学研究所、低圧低圧実験室にて)
 - 1月29～31日 第二回低圧実験
 - 2月12～14日 第三回低圧実験
 - 3月5～7日 第四回低圧実験
 - 4月9～11日 テレメーター実験(白馬乗鞍岳、船池にて)
 - 8月7～9日 第五回低圧実験
- 出発から現地到着まで
- 10月11日 隊員12名、横濱港を川崎汽船ボリブテラ丸にて出発
 - 11月14日 高木隊長羽田発
 - 12月1日 ボリブテラ丸・メルライオン(チャー)に到着
 - 12月9日 隊長以下13名、6トンの荷物と共にメルライオン丸に
 - 12月10日 登山基地フェウチ・テル・イソカ(プルゼンツン)に到着

高所医学研究

- 1965年12月15日 テロンカグア北面フラス・ヂ・ムーラス(4230m)にベーンキャンソフ建設
- 12月23日 テレメーター基地建設
- 12月30日 石原北山より登頂を試みプルゼンツン陸軍将校と共に石原登頂
- 1966年1月5日 被験者3名、付添2名6800m(内1名は頂上直下)に到達しテレメーターによる心電図受信に成功する。
- 1月8日 全隊員フェウチ・テル・イソカに下る(北面のベーンキャンソフ建設)学術班4名帰国、登山班は残留
- 南壁登攀
- 1966年1月16日 南壁フラス・フラスソフ(4200m)にベーンキャンソフ建設
- 1月25日 第1キャンソフ(5100m)建設
- 2月2日 第2キャンソフ(5800m)建設
- 2月18日 第3キャンソフ(6300m)建設
- 2月24日 4名南壁完登
- 3月1日 フェウチ・テル・イソカに下る(南面のベーンキャンソフ撤収)
- 3月4日 メンポルサに下り準備を整える
- 3月13日 パタゴニア地方踏査
- 3月13日～30日、カチパル・トロパドール登頂
- フエゴ班(1名)、3月13日に4月3日、オリビエ登頂、帰路ラ・イ・フェル・ヘンツァイオンを探る
- フエゴ班・ロイ班(3名)、3月20日～4月29日、フエゴ班、ロイ班、トリス山塊および大陸氷河探査、帰路バリローチェを探る
- 5月24日 日本汽船フラス丸にて帰国した4名を最後に全員、全ての計画を終了して帰国

お部屋の飾りに! 贈りものに!

- 全紙半切 パネル張り ￥1,000
- 全紙(新聞1ページ大) " ￥1,500
- 全紙2倍 " ￥4,000

上記以外のサイズ、または同時に多数ご注文の際は、ご照会下さいれば別にお見積り申し上げます。

山岳写真を 本多写真工房

(本多善博)

名古屋南区柴田西町 1-16 電話 (611) 7047

あなたのネガから、大型パネル(枠)張り

あなたのネガから、明快なコントラスト適切なトリミング(構図)で、大型・美麗・パネル張り写真を製作いたします。ネガと送料150円同封でご注文されれば到着後5日以内に製作発送いたします。代金は着品後10日以内にご送金下さい。結構です。なお代金前払いの方は送料は弊社で負担いたします。また、特にトリミングをご希望の方はその旨明示して下さい。但しネガ不調のため作品にご満足頂けないと思われる場合には、ネガ、代金、送料ともそのまま直ちに返送申し上げます。



第三回 海外登山技術研究会報告

昭和四〇年四月二十九日～五月二日
本会福島支部の協力により、東吾妻、新野地温泉にて日本山岳協会主催で開催された。標記研究会の報告書である。(会報二四一～五頁参照)

この研究会の意図や、研究内容がよくわかり、巻末の参加者の感想文は、この種の研究会のあり方を知るのに好都合である。海外登山に関心をもつものは一読をお奨めする。

B5版横組タイプオフセット、七十七頁、地図二枚、昭41・4、日本山岳協会発行。非売品。
尚入手希望者は、頒価二〇〇円(送料込)を添えて本会宛お申込み下さい。

本会宛お申込の方には、第一回研究会(於月山)の報告が若干ありますので先着順に在庫のある限り第三回と一緒に送り致します。尚、既に第三回の報告書をお持ちの方で第一回の報告書のみ、御希望の方は送料三十五円をお送り下さい。(松田)

ケブネカイセ山に登る

ケ峰はスカンジナビア北極圏内の最高峰(3116)であるが、今度会員脇坂順一氏が日本人として初めてこの山に登った。詳細な報告が編者当てに来たので、次号に略図と写真入りで紹介したいと思う。(吉沢)

会務報告

第六回登山技術研修会

日本山岳会東京支部

▽日時 昭和41年5月21～23日
▽場所 「講義」 神河内山荘
「実技」 岳川谷間ノ沢

△趣旨▽

前回までの講習会の名称を研修会と改めたのは、受講者諸君がそれぞれの講師との三日間の生活の中で、その密接な触れあいを通して、単なる水雪技術だけでなく、登山について深く考え意欲的に学び取っていただきたいと願ったからであり、そのために総てを天幕使用とした。

△受講者氏名▽

山口節子、都筑竜、神谷風夫、高木房子、高石曉子、小郷喬史、松村昭則、伊藤和男、今野征之、齋藤彰、秋田しおみ、松井豊、古畑宏道、常勢秀樹

△編成▽

○本部 山崎 安治

チーフリーダー 村木潤次郎

技術リーダー ドクター 八巻 功

総務係 広谷光一郎

食糧係 松永 敏郎

装備係 鈴木 和信

講師 村木潤次郎、広谷光一郎、松永敏郎

倉知 敬、上田富男

△行動概要▽

五月二十日、二・三・〇〇 新宿発

五月二十一日(曇後雨)五・〇八松本着、貸切バスにて八・一五上高地着

八・三五神河内山荘着、朝食後各班に別れ九・二五山荘発、雨の中を登る。

一一・三〇岳川谷西穂高沢出合対岸付近に到着。ただちに設営。降雨のため

午後沈没。
五月二十二日(雨) 早朝より雨のため、神河内山荘で講義を行なうこととなり、九時設営地発、一〇時山荘着、左記の講義と質疑応答を行なう。

岳川谷をめぐる山と人 (山崎)
登山者としての心構え (松永)
装備について (村木)
登山者の救急処置 (八巻)
アンデスの山と人 (倉知)
ヒマラヤの山と人 (広谷)
台湾の山について (小味)

終了後、ウェストン師碑を見たのち三・二〇山荘発、四・四五設営地帰着
五月二十三日(曇後雨)
七・〇〇設営地発、間ノ沢にて雪上歩行・コンティニューアスにおける確保・スタカット時の確保技術等を練習、一

一・三〇終了、ただちに設営地に帰着
天幕撤収後一三・三〇発、一四・四〇上高地着、一五・一五貸切バスにて松本へ、二〇・三〇発列車に乗車、二十四日四・二七新宿着、本研修会を無事終了して解散した。

たお、東京支部沼倉委員長、小味委員が特別参加されたのを付記します。
尚、五月三十日ルームで行なった反省会の結果を簡単に報告します。

研修会中、雨のために技術講習に關しては効果を挙げる事ができなかったが、天幕生活を通してリーダーと十分話しあうことができ、天幕内での生活技術や雪上基礎技術に従来の誤りを正すことができた。

又、神河内山荘での講義は非常に為になったが、たとえ二日程度のもので何回か小研修会を開催して欲しいとの意見が多くあった。

講師側の意見としては、今後は堅苦しい形を取らずに自由な山行形式で若い人達と交流したい、今後ともに講習生が常に講師に接触して欲しいのとことであった。(松永記)

常務理事会

▽日時 六月十三日(月) 六・三〇

▽場所 本会ルーム

▽出席者 加藤、村木、大塚、飯野、宮下、川崎、松田各常務理事

▽議事

(1)吉野昇氏退職の件
吉野氏退職に伴い、退職金を支払うことを決定。

(2)川瀬伊三郎氏採用の件
吉野氏の退職に伴い、後任として飯野常務理事より推薦のあった川瀬伊三郎氏を本会書記として六月十六日より採用することを決定した。尚川瀬氏は通勤のため、勤務時間は午前十時三十分より午後六時三十分(土曜日は午後三時迄)とする。

(3)若村事務員勤務時間変更の件
事務強化のため従来パートタイムであった若村事務員をフル・タイム(勤務時間は川瀬書記と同じ)に変更することを決定した。

(4)本会ルーム移転の件
前回の理事・評議員会に沼倉東京支部委員より紹介のあった、外苑コーポ内二階の室に移転する件は、事務室の改装に一〇〇万円近くを要する見込みなので見送ることにする。

(5)実行予算案検討の件
飯野常務理事より状況説明あり。

(6)什器備品等管理規定検討の件
松田理事作成の原案は、ルーム担当宮下理事が主とするとし、この規定に基き早急に整備することにする。

(7)その他報告事項

①帯広エーデルワイスクラブ台湾登山隊に対し推薦状発行の件：書類をととのえた上で承認することとし海外登山担当理事に一任

②グルジア山岳会来日件の件
本日の横浜山岳会主催の歓迎会には本会より、三田副会長、松田理

事が出席した。尚、めずらしい来訪者なので、横浜山岳会の要請があれば本会でも歓迎会を行なうことを決める
以上

常務理事会

▽日時 七月一日(金) 六時三〇分

▽場所 本会ルーム

▽出席者 加藤、大塚、松田、飯野、宮下各常務理事

▽議事

(1)職員に関する職務規定案検討の件
川瀬書記就任後の事務内容を明確にするため、従来不明確であった職員就業規則、職務分掌等につき、規定を作ることにし、飯野常務理事作成の原案を検討し、七月七日より施行することを決める。

(2)職員給与並びに退職金支払に関する規定の検討
前項に基づく職員の給与規定、並びに退職金支払に関する原案を検討した結果、この原案を七月七日の理事会にかけることを決める。

(3)ルーム使用規定案検討の件
吉野氏の退職により、ルームの常駐者(従来のように宿泊している者)がいなくなるので事務取扱時間終了後のルーム使用の規定を明確にしておく必要があり、松田理事作成の原案を検討の結果、この案を七月七日の理事会にかけることを決める。

(4)前項の実施について
前項に關連し事務取扱時間終了後の職員サービスを考慮し、理事・東京支部委員による当番制を実施することを申合せ、この旨ルーム担当宮下理事より七月六日の支部役員会に説明して諒解を求めらることにする。

(5)ルームの備品等管理規定について
ルームの備品・備品類の管理を明確にするため、規定を早急に作り、銘板をつけるようにし什器・備品の台帳をつくることにする。担当は宮下

理事。尚、会の固定資産で償却するものもあるので、飯野理事もこれに加わることにする。

(6) 図書管理規定について
図書担当の倉知理事に依頼すること

(7) その他
① ルームの手提金庫を収容するステールキャビネットの購入を決定
② 吉野氏退職金の金額をきめる。これには別に退職慰労金をできるだけ会員から集めることを申し合わせた。

③ ルームの鍵を取扱うための役員証の印刷をきめる
④ 越後支部総会、東海支部のアンデス報告会に、会から参加する人につき検討したが、都合つかず、今回の派遣は見合わせることとした。

七月理事・評議員会

(七日・ルーム)

△出席者 松方会長、三田、渡辺副会長、理事一加藤、村木、大塚、松田、飯野、宮下、川崎、小方、住吉、竹田、広谷、平山、倉知、長尾、山口、評議員一望月、島田、吉沢、石原、村井、藤井、折井、後藤、津田、山本支部長、沼倉東京支部委員
(以下委任) 評議員一佐藤、中屋、高山、須賀、監事一松本
△議事

(1) 六十周年記念展覧会報告……折井尚、パネル写真およびパンフレットの処理については七月十四日の六十周年展覧会準備委員会の提案に基き、決定は常務理事会に一任することにする
(2) 本会職員交替の件
吉野昇氏の後任として書記として採用した川瀬伊三郎氏を紹介、尚前任者吉野昇氏の退職慰労金の募集についての協力が要請された。

(3) 支部長会議開催の件

七月三十日(土)午後二時より麻布国際文化会館と決定
七月二十一日(木)午後六時より、場所は常務理事会にて決める。

(4) 新旧役員交代会開催の件
(5) 職員関係諸規定検討の件……飯野常務理事会で作成した「主事・書記等職員の職務に関する規定」「職員の給与・退職金に関する規定」を検討し、字句についてこのまゝに決める。但し、若干問題になる箇所もあるので、その点については、常務理事会で再検討することとする。

(6) ルーム使用規定検討の件……松田常務理事会の原案を説明。承認する(一三頁参照)
(7) 当番制実施に関する申し合せ……宮下会員サービスの一環として、ルームの事務取扱い時間以後八時迄の間、理事、東京支部委員により当番にあたることについて申合わせを行なう。

(8) 図書閲覧並びに貸出規定……倉知今後はルームの図書の規定には鍵をつけ、所定の図書閲覧票に記入の上、書記から鍵を借用する様にするため、又貸出についての手続方法を明確にするため規定案を作成、その説明があったが、本規定については常務理事会において再検討することにする。
(9) その他報告事項

支部報告

(i) 東京支部……石原山を十月の十五・十六日光の太郎山で行ない、十一月には記念パーティー、講演会を行なう予定(一二頁参照)
(ii) 婦人部が十一月十二日神戸港

発でニュージーランドへ出かける。本件については支部にこだわらず会として協力することを確認する
(H) 関西支部……住吉支部ルームをスポーツマン・クラブに移転を完了した。(一二頁参照)
③ 庶務、海外連絡……松田
④ 経理……飯野
人件費の増加、郵便料の値上げ等により、予算は増加の一途をたどっているが、実行予算の提出がおくれているが、この調子では会費の値上げでは追いつかない見込なので、早急に財務委員会の設置を要望する
尚、六十周年記念事業予算残額十五万円は展覧会のパンフレットに支出することにより収支は零になる。
⑤ 富士山頂診療所の件……長尾
今年度は原省の予算に未計上であったが、県の予算を確保できたので七月中は慶応大学生理学教室、八月は東京歯科大学が担当することにし本会にて厚生省宛借用願を出し借用することに致したい。本件承認す。⑥ 八月の定例理事、評議員会は休会とする。以上

第四回・海外登山技術研究会

日本山岳協会主催による海外登山技術研究会も、本年は四回となった。長野県白馬岳山麓の親・原東急山荘に於て、四月十九日より五月二日までの四日間、全国より集った百二名の参加者を得て、盛大に開催された。今回も昨年と同様に一九六五年度に海外へ遠征した各隊の報告を中心に活発な意見の交換があった。その他に、今般は地域別と問題別によるディスカッションも行なわれた。この研究会に参加するたびに思うのは、年を追って、我が国の海外遠征は盛んになり、海外登山の

経験者も増え、水準も非常に高まってきているということである。この研究会そのものも、最初、月山で行われたときから比較すると、内容が豊富になっている。内容の全てを報告できないのは、残念だが、日本山岳協会より、くわしい報告書が、そのうちに出されると思うので、特に興味のある方は、それを読んでいただくことにして、プログラムだけを別記しておく。

開会挨拶 日高信六郎
小沢利一郎
松田雄一
歓迎の言葉
研究会の主旨
特別講演
アイガーよりマナスルまで 榎 有恒
南極より帰えりて 竹節作太
海外登山の動向 村山雅美
海外の登山財団 松田雄一
海外遠征報告 田中栄蔵
ダウラギリII峯 杉田 博
ロジュン・シャル 成川隆顕
ギョジュンバカン 藤田佳宏
キンヤンキツシュ 牧野内昭武
ミール・サミール、シャー・フラ 四方田 靖
デーイ・モンデイ 矢野 敏
ミール・サミール 佐藤之真
サルカントアイ 江上 康
ペルー・アンデス 井田英彦
ペルー・アンデス 細野淳美
ペルー・アンデス 滝口義弘
ニューゼaland 堀沢清人
クック島 橋本 清
マクマド基地 向一陽
ローガン 大須賀 浩
マッキンレー 梶浦正教
ドンジャック 芳野越夫
グリーンランド 田島錦重
アルビニスト集會 倉知 敬
ヨーロッパ・アルプス ヨーロッパ・アルプス 星川政範
加藤幸彦

マッターホルン北壁 服部満彦
ネパール旅行 佐伯郁夫
薬師義美
○パネルディスカッション
(地域別) カッコ内はパネルメンバ
(1) ネパール・ヒマラヤ(宮下秀樹)
(2) カロルム・ヒンズークシュ(平井一正)
(3) アラスカ(芳野越夫)
(4) アンデス(金井健二)
(5) 南極・ニュージーランド・グリーンランド(深瀬一男)
(6) ヨーロッパ・アルプス(田附重夫)
(問題別)
(1) 文献研究(田中栄蔵)
(2) 高所医学(古原和美)
(3) 登山技術と遭難対策(金坂一郎)
(4) 遠征マネージメント(丹部節雄)
その他に一九六六年、一九六七年に出発する予定の登山計画が紹介された閉会の言葉 高橋定昌

出席者

高橋(定) 高橋(昭)・大塚・松田・藤代(以上本部) 小沢・古原・中島・町田・堀沢・堀内(以上地元)・阿部・井田・伊藤(老)・伊藤(久)・池田・江上・遠藤・尾上・大倉・大森・小川・小方・大野(二)・大野(光)・沖・折井・加藤・梶浦・片山・金坂・大須賀・川崎・神原・金井・清原・桑原・栗林・向後・小森・佐藤・笹川・酒巻・佐々木(節)・佐々木(都)・佐伯・杉田・樹林・住吉・田附・田代・田中・渡辺・滝口・高木・竹内・竹節・丹部・長尾・成川・成瀬・橋本・半沢・日高・平井・平林・広谷・深瀬・平野・藤口・舟橋・星川・細野・堀田・槇・牧村・牧野内・松沢・宮下・宮本・向・村井・野山・八木・矢野・薬師・山崎・山下・白鳥・四方田・芳野・渡辺(兵)・脇坂・大江・倉知・佐藤(久)・富樫・高橋(弘)・早川・吉田・三田・服部 以上九八名

お願い・お知らせ

吉野氏退職慰勞金募金の件
理事 会

このたび健康上の理由により退職されることになった吉野氏には、会としては財政上の理由により充分な退職金も支払うことができませんので、日頃世話になった会員各位から募金を行なうて吉野氏の労に少しでも報いたいと存じます。
何卒御賛同の上、御協力の程お願い申し上げます。

〔送金先〕 本会事務所内、吉野氏退職慰勞金募集係。
尚吉野昇氏は左記に転居されました。
東京都世田谷区砧町二ノ一八八
友愛十字会老人ホーム内

会費納入についてお願い

理事 会

よく「日本山岳会ぐらいのんびりした会はない。」という言葉を耳にします。たしかに昨年迄は会費の請求については実に鷹揚でした。会費を四年間滞納していても会報だけは届けていたのですから、たしかにのんびりしたものでした。しかもその大半が入会金、初年度会費のみで退会していく会員でありました。そして会の経理状況を分析してみました。これら滞納会員のためのサービス過剰が大きく会の財政を圧迫していることが判明しました。

そこで今年度からは滞納会員には会報の送付をさし控えると共に事務局の態勢を整備し、会費の徴収に力を注ぐことになりました。よその会には、新年度になって会費の納入がないと即刻発送停止という会もある程です。本会は、そこ迄切迫する程にもまいりませんが、会費納入の七月末には大部分の

会費が納入されるように御協力戴きたいと思います。申す迄もなく会はその年度の会費によって運営している訳でありますから、会費の納入が悪いと会報も発行できなくなります。何卒宜しく御協力下さいませ様重ねてお願い申し上げます。

ルームの使用について
七月七日の理事・評議員会でルーム使用規定が承認されましたので今後はこの規定に基づき、ルームの使用にあたっては左記の点に御注意下さい。

理事 会

- 1、ルーム開室時間は、原則として日曜、祝祭日を除き、午前十時三十分より、午後八時迄です。但し、会費受付等の事務取扱いは、午前十時三十分から午後六時三十分迄(土曜日は三時迄)で一時〜二時は休憩時間となります。六時三十分以後八時迄はルーム当番が担当します。
- 従って図書を開覧される方はこの時間にお願ひします。
- (日曜・祝祭日は健取扱いのできる役員がお済みと利用できませんので御諒承下さい)
- 2、当分の間、会務以外の会合のためにルームを貸室することはいたしません。
- 3、ルームの鍵は、原則として理事、常任評議員、東京支部委員以外はとり扱ひできません。
- 4、図書を開覧される方は、別に定める図書閲覧、貸出規定によりますので、この規定を厳守して下さい。

5、不明の点がございましたら、事務所または担当理事にお問合わせ下さい。

第三の極を目ざして

日本山岳会創立六〇周年記念展
パンフレット頒布のお知らせ

標記展覧会の記念パンフレットを本会の編集で毎日新聞社より発行致しました。
このパンフレットはB五横版全アト三十六頁の豪華なもので左記の内容からなっております。展覧会の会場にて一部二〇〇円にて頒布したものですが、会員各位には一部二〇〇円(送料本会負担)にて頒布致しますから御希望の方は申込み下さい。

【主要内容】

- 一、あいさつ
- 一、日本山岳会小史
- 一、八〇〇〇メートル峰初登頂一覽
- 一、山岳設立主旨書
- 一、発起人、歴代会長の紹介
- 一、日本主要登山年表
- 一、登山六〇年の歴史
- 一、山の悲劇をなくそう
- 一、美しい自然を守ろう
- 一、エレストをめざして
- 一、日本の海外登山
- 一、雪男の謎
- 一、セントエルモの火
- 一、ガルツェンの死
- 一、山は美しい
- 一、エレスト関係文献
- 一、出品目録

以上

ヒマラヤ・ポストカード

風見武秀氏撮影のヒマラヤ・ポストカード(六枚一組)御希望の方は、一

組一五〇円のところ二割引き、一二〇円でお取次いたします。但し送料は二五円かかりますから、地方からお申込みの方は送料をお忘れなく。

事務員交替のお知らせ

理事 会

長らく会務のために尽力された吉野昇氏が健康上の理由で六月末日を以て退職されることになりましたので、後任として七月一日より、川瀬伊三郎氏が就任されましたので御紹介致します。尚川瀬氏は自宅より通勤されますので、勤務時間は午前十時三十分より、午後六時三十分となりますのでこの点も御諒承下さい。

お詫ひ

事務引継ぎの際の不手際のため、会報二五〇号〜二五二号、洋書目録、総目録等が、当然行くべき方(会費を納入されている方)にも一部未着となり大変御迷惑をおかけ致しました。つきましては、未着の方はその旨の事務所宛御一報下さいませようお願いします。折返し未着の会報は直ちに発送させていただきます。



主な海外登山隊

一九六六年

- (15) 横浜山岳会隊
顧問 袋 一平
活動地域 カフカズ
登山目標 シハラ(五二〇一m)
ウシニバ(四七二〇m)他
- 隊員 橋本金作(53)、湖出昭雄(38)、石井修一(34)、羽生哲夫(33)、山田一治(31)、池谷有爾(31)、杉山敦弘(30)、中島徹夫(28)、平山昌昌(28)、内田昌子(医、28)
- 総経費 三、六〇五、〇〇〇円 内訳
- 招待費 二、六一五、〇〇〇円
- 遠征費 七九〇、〇〇〇円
- 予備費 二〇〇、〇〇〇円
- 【注】既にカズベック峰(五〇四七m)登頂のニュースあり。
- (16) 早大アフリカ縦断登山隊
活動地域 アフリカを北より南へ縦横断する
- 登山目標 アトラス山脈、アハガル山、ルウェンゾリ山群、キリマンジャロ山
- 隊員 和田匡弘(32)、藤沢睦夫(29)、三木常晴(26)、井上吉弘(23)、真下健弥(23)、梅崎興一郎(24)、岡崎昌代(22)、久富征夫(22)、松下行雄(22)、黒瀬節子(21)、岡部紀正(医、慈恵大、26)、上野俊郎(写真員、39)
- 総経費 八、〇〇〇円
- 【注】8月17日横浜発、モスクワ経由、マルセイユ、アルジェに着10月1日。帰国は42年3月31日の予定。
- (追補) (6)の上田隊、8月2日帰国。
- (9)の神奈川隊、キリマンジャロとルウェンゾリ山登頂。10の千葉大隊、7月20日、ミール・サミールに登頂。
- 尚、編者の手許には、来年度分として、長野県並びに東京農工大の、ヘル・アンデス、兵庫県ユニオン隊の計画書が来ている。

磯野計蔵氏

六月二七日慶応病院で膀胱癌のため逝去。五八歳。氏は昭和五年六月入会（会員番号一一八六）終身会員。昭和一〇年一二年理事をつとめた。昭和六年一橋大卒業と同時に明治屋に入社同社社長でキリンビールの監査役も兼ねていた。一橋大在学中は山岳部に在籍し活躍した。『山岳』への寄稿は「爺小屋を根拠とする冬の鹿島槍ヶ岳」（二六年一号）があり、昭和五年冬の鹿島槍登頂の様様を述べている。またオーベル・エンガインのヴァル・フックスのことを『針葉樹』第七号に述べている。

本会は三六年に亘る古い会員の逝去に対し謹んで哀悼の意を表する。（望）

他山の石（Ⅱ） Y・M

七月九日付の朝刊は、黒磯町の用水トンネル内での悲しいガス中毒事故を一斉に報じた。新聞によれば、携帯用発電機をトンネル内に持ちこんで使用していたために、排気ガスの一酸化炭素によるガス中毒であった。

この発電機が本田技研で開発され、発表されたとき、これは今後登山（特に海外遠征登山）に利用して、大いに偉力を發揮するであろうと、この種ゼネレーターの開発が待たれていただけに喜んだものである。と同時に、かつて、三鷹の運輸省技術研究所の低温低圧実験室内で、発電機のテスト中に一酸化炭素中毒で大塚氏ら全員が倒れたことを思いだし、取扱いには充分に気をつけなければ危いと考えていた。その矢先に今回の中毒事故である。この事故はトンネル内の事故だといって簡単に見過してはならない。今後登山にこの発電機を使用する際には雪洞の中や、冬用天幕の中では絶対に使用してはならないと思う。

今回の事故を他山の石として充分に心すべきであると考える。注意を喚起する意味で敢えて筆をとった次第である。

第二次グリーンランド隊
フォレル峰に登頂

松田君よりの至急連絡によれば、日本大学の第二次グリーンランド隊は、フォレル峰の他に相当数の山に登り、無事基地に戻った由。まずはお目出たい。詳細はいずれお目にかかれと思う。

第一回 J A C
ゴルフ会報告

金坂 一郎

かねてより本会々員の中には天狗の数も少なくないと思きおよんでおりますが、六月七日、梅雨の晴れ間に恵まれて、第一回 J A C ゴルフ会を、三田幸夫、成瀬岩雄、青木昇、三氏の世話人により、相模カンツリ倶楽部において開催致しました。せつかくのお天気にもかかわらず、スコアの方はさっぱりで、特別参加の青木夫人の目覚ましいプレイに強剛の面々も大半のリードを許し、あれよあれよという間に空しくストロークを重ねるのみという一幕もありました。

参加者および成績については別表の通りであります。世話人の調査にもとずきこの外に、吉沢一郎、島田巽、堀田弥一、石原巖、佐藤久一朗、今西寿雄、竹節作太、望月達夫、織内信彦、太田敬、加藤喜一郎、村木潤次郎の諸氏に御案内致しました。次回は十月か十一月頃オール・スポーツマン・ゴルフ大会の強化合宿を兼ねて開催の予定ですが、前記諸氏以外の名手を御存じよりの方は、世話人までお知らせ下さるようお願い致します。次回世話人は入沢文明、金坂一郎が相つとめます。

今回は山晴社佐藤久一朗氏、山啓加藤喜一郎氏より沢山の賞品を御寄贈頂きました。ここに厚く御礼申し上げます。

PLAYER	OUT	IN	OUT	TOTAL	NET
金坂一郎	46	48	45	139	113.5
入沢文明	44	48	44	136	118.0
小原勝郎	43	49	45	137	119.0
青木昇	51	54	47	152	129.5
三田幸夫	53	52	60	165	133.5
成瀬岩雄	50	62	56	168	139.5

編集後記

加納一郎氏から来た最近の「会報」に対する御意見御尤もと思う。大いにその方向に向けて努力したい。だが、と書き出すと又愚痴になったり、言訳になったり、又、私のことだから人をおこらせてしまう結果になるので止めておく。要はいわゆる格調の高い原稿をドンドン送って頂き「悪貨」の入り込む隙をなくしてしまふことである。そして、もっと閑暇があり、識見の高い、レパトリリーの広い立派な人を編集者に選ぶことである。老人（といつまでもこき使っている日本山岳会もいけないのだ。会報を地方の有能な士に編集してもらふことも考えられるが「山岳」とやや違うのでこれは無理である。加納氏のような人が時々カンフルを打ってくれるのいいと思う。ときに、会員通信と図書原稿が大部たまってしまったので、この次はそれらの特集号みたいなものを出したいと思う。海外登山隊の成果もそろそろ報道されて来た。然し、今年あたりから初登頂というものが殆んど聞けなくなった。これも又止むを得ないことではあるが、一沫の寂しさはある。とに角明日は又、有給休暇でもとって会報の編集をやりましょう。早くやらないと、又、督促原稿が来る。（吉沢一郎）

昭和四十一年七月十日発行

東京都渋谷区神宮前
三ノ三 外苑コーポ内

発行所 社団法人 日本山岳会

編集代表 吉沢 一郎

頒価五十円

電話(03)六五〇一、五
直通(03)七六五、七
振替口座東京四八二九番

東京都港区赤坂溜池五番地
印刷所 株式会社 技報堂

☆会報製本御引受け☆
製本代 (201号~250号) 金 600円也
送 料 別 受 け

中林製本手帳株式会社

東京店・文京区水道端2~15、電話(945)0311(代表)
大阪店・都島区相生町7、電話(352)3491(代表)
名古屋店・昭和区雪見町1~15、電話(731)7331(代表)
工場：大阪工場(堺市)、東京工場(戸町)

▶背文字その他については往復はがきで
日本山岳会内「会報委員会」に御相談下さい

登山における
人体工学追求の
勝利!!

画期的な新製品

シャモニー
キスリング

株式会社 サクライ

TEL (861)0933-5 (851)3356-8



Tirotian